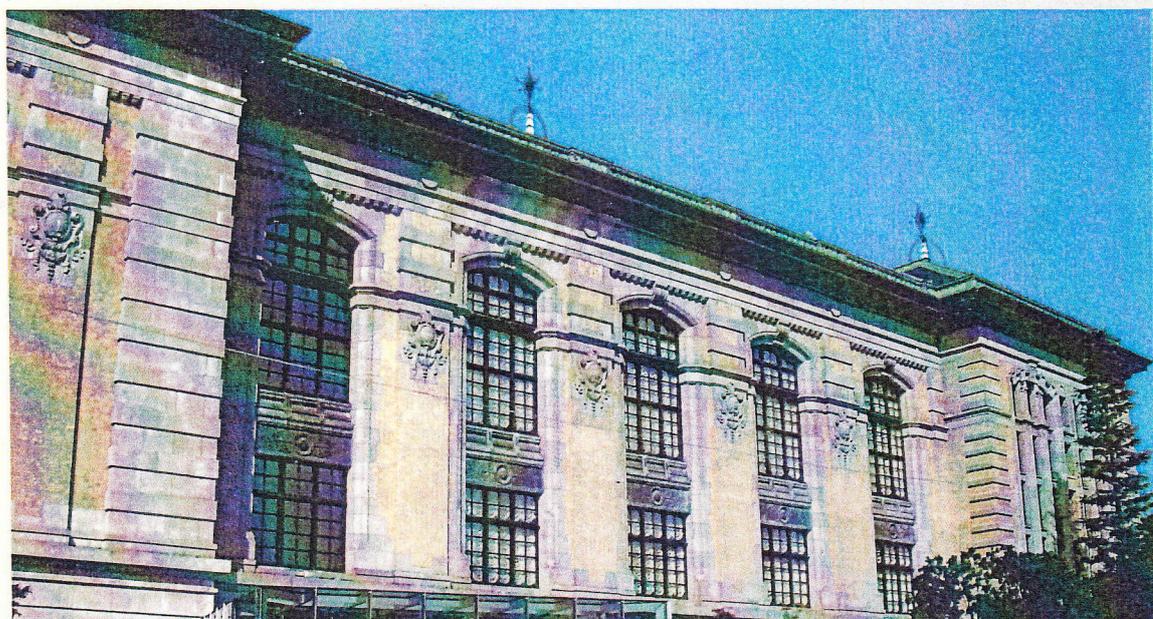


近現代日本 人物史料情報辞典3

伊藤 隆・季武嘉也 [編]



近現代史を読み解く、263人の
貴重な〈個人史料〉データファイル第3弾!

シリーズ収載人物はいよいよ1000人突破! 研究者・作家・マスコミ・図書館必備。

吉川弘文館 定価(本体7,500円+税)

下山定則(しもやま・さだのり)

明治三十四—昭和二十四年(六〇一—六四九)

鉄道官僚・運輸次官・日本国有鉄道総裁
遺族俊次氏によるとまったく史料が残されて
いないという。

下山に触れた唯一の書籍として下山定則氏
記念事業会編刊『下山総裁の追憶』(昭和二十
六年)がある。加賀山之雄の序を持つ本書は、
「略年譜」、「生い立ち」から「葬儀」までを
追った伝記(中にそれぞれの時代を知る人び
との座談や追憶談、昭和十一年(一九六六)三月
から翌年十二月までの欧米視察の際に家族に
送った絵葉書通信、「南阿南米の話」(『汎交
通』三十九—三、昭和十三年)などが多く挿
入されている。これらも現在遺族の許には残
されていないという)、「追憶集」などからな
る。

下山が国鉄総裁として、昭和二十四年七月
五日に行方不明となり、翌早朝に東京足立区
五反野付近の国鉄線路上で轢断死体として発
見されたという不慮の事件で亡くなった「下
山事件」については、自殺説、他殺説、後者
についても犯人についてのさまざまな推測が
なされ、大量の書籍が刊行され続けている。
すべてを網羅しているとは言えないが、最近
文庫本として復刊された諸永裕司『葬られた
夏—追跡下山事件—』(朝日新聞社、平成十八

年)巻末の「参考文献・資料」は参考になる。

ネットの下山事件史料館(<http://members.ytv.home.ne.jp/shinoyamania/biblio.html>)

も参考になる。そこには、事件前に下山につ
いて書かれた記事や、下山の生前の著作物
(少ないが)もリストアップしているが、その
他に「仏印・泰の近況を聴く」(『旅』昭和十
六年六月号)もある。

昭和五十六年十一月十五日の『朝日新聞』
は「下山事件他殺説の捜査記録目録みつかる」
という記事を掲載し、東京地検が作成した
「下山事件関係書類(物件)総目録」について
解説し、一部の写真を掲載した。その写真を
見ると、「下山定則日記二冊」、「手帳五冊」、
「カレンダー付予定表メモ八枚」、「面会人簿
(下山総裁)四冊」、「下山総裁生前日記一冊」
などと記されており、目録作成時下山家か
ら押収したこれらの史料があったことは確か
であろう。ただこれらは遺族には返還されて
おらず、東京地検の話では保存されていない
と答えている旨が報じられているので、現在
の存否は不明である。(伊藤 隆)

白仁 武(しらに・たけし)

文久三—昭和十六年(六三—六四九) 内務

官僚・栃木県知事・実業家

栃木県知事時代の史料が、平成九年(一九七
七)遺族から関係の二カ所に寄贈された。一つは

一般行政関係文書一〇六点が栃木県立文書館
もう一つは足尾鉍毒事件に関わる谷中村廃村
関係文書十三点が研究団体田中正造大学であ
る。

県立文書館のものは、白仁が明治三十七年
(一九〇四)から三十九年まで二年半の間に知事を
していた時期に県行政にかかわるさまざまな
文書のうち県・郡・町村の予算関係、教育関
係、日露戦争にかかわる徴兵・出征者数、足
利織物振興関係など多岐にわたるが特にまと
まった関係資料ではない。また若干の書簡が
含まれる。目録が作成されていて当館で閲覧
できるが、個人の履歴書等は閲覧制限がなさ
れている。

知事時代は、ちょうど足尾鉍毒被害の解決
策の一環として渡良瀬川の洪水被害を防止す
るため計画された谷中村遊水池設置計画がな
された時期で、明治三十七年十二月の第八回
通常県会で谷中村買収案が可決成立した。こ
の県会審議をめぐっては当時大きな政治問題
となっていたものであり、田中正造大学に寄
贈された十三点は正にこれに関する県側の直
接の資料で、この中には知事白仁から内務大
臣芳川顕正宛の「谷中村民有地ヲ買収シテ遊
水池ヲ設ケル稟請」書、谷中村堤防請願委員
から知事宛「請願書」、谷中地元民から知事
宛「築堤請願ニ付至急陳情書」などが含まれ
ており、従来は鉍毒被害救済運動側から見た

菅禮之助(すが・れいのすけ)

明治十六—昭和四十六年(二六三一—二七二)
 帝国鉱業開発社長(戦前)・石炭庁長官・
 東電・電気事業連合会・原子力産業会議
 の会長・俳句会の重鎮(『同人』主宰)

菅には句集や作品を除き、「自伝」はない。
 極く限られた期間の日記、菅がいた多くの
 組織の刊行物中の、昭和十年(二五三)以降の文
 章等の一覧は『雁わたる』(三月書房、昭和三
 十九年、俳名・菅裸馬での著書)にある。

秋田県土崎に生まれ(生家は、父禮治が明
 治天皇行幸時の宿泊を受命した素封家)、秋
 田中学・日本中学から明治三十八年(二五五)東
 京高商(現一橋大学)卒、古河鉱業入社、第一
 次大戦後大陸に跨る不祥事摘発や建て直し・
 合併の中心となるなど、幹部を務め三十年近
 くて退社。中学・大学でのストライキ・放校・
 復学などの「反骨」行状を皮切りに、型破り
 の逸話の数々は、後記の書に詳しい。

昭和十年代前半は、主として俳句と禪(そ
 れぞれ青木月斗、鈴木大拙に傾倒・親交)の
 世界に沈潜。戦雲急を告げ、政府が資源確保
 に急遽設立した「帝国鉱産」の社長にかりだ
 されて終戦。この辺までは、河野幸之助『菅
 禮之助』(現代人物史伝)(日本時報社出版局、
 昭和三十三年)に記述されている。

戦後直ちに、吉田首相の懇請で石炭庁長官。

続いて配炭公団総裁(兼務)となり、労組の協

力をとりつけ経済復興の先駆けを努める。占
 領軍の命で国営の日本発送電が分割・民営化
 された激動期には、松永安左エ門の説得で東
 京電力の社長・会長に就任、「民営・地域独
 占の公益事業」という最初の雛型創りを成し
 遂げる。昭和三十年被爆国日本が原子力開発
 を始めた時、民間各界が国民的立場で大同結
 集し設立した「日本原子力産業会議」の会長
 に推された。畢生の日まで、この未踏の大事
 業に、政府・地域・水産業等と真に共生する
 「原子力文化」という革新的概念を創出・定
 着させる中心となった。このような戦後の活
 動の日々は石井阿杏『裸馬先生愚伝』(三月書
 房、昭和四十七年)に、秘話も交えてリアル
 に書かれてある。また原子力については、同
 会議の刊行物(『日本の原子力—十五年の歩み
 —』(昭和四十六年)、『原産 半世紀のカレ
 ンダー』(平成十四年)などに詳しい)。

俳句は、十四歳時の句「目の窓は窓の破れ
 より時鳥」(秋田『魁』紙に入選、俳号「閑月」
 に始まり、その方を越える句と選評等は同人
 社編『裸馬翁五千句』(俳句研究社、昭和三十
 九年)をはじめ、昭和の句集『玄酒』(近藤書
 店、昭和三十三年)、清水栄編『春の霜』(同
 人社、昭和五十三年)などに、歴史八十年で
 近く一〇〇〇号を迎える『同人』誌には、い
 まも知人・友人またその子息の寄稿が続いて

いて、史料といえるものも少なくない。

『うしろむき』上・下(俳句研究社、昭和三
 十三年)にある随筆や、数々の句碑建設など
 の行動には、縁の下あるいは悲運の人への深
 く温かい思いが流れている。『錦島三太夫の
 死』(昭和八年)は、昭和初期、理事長の専横
 に立腹した力士大多数が脱走という、相撲史
 上最大の危機に身を挺して収拾した人情物語。
 花柳章太郎の発意で金子洋文が脚本、上演は
 好評を博し、後の日本テレビ日曜劇場「横綱
 以上」でも、菅と襲名の大関能代瀧が主要登
 場人物となる臨終場面等、茶の間の涙を誘っ
 た。また二十八歳で散った歌人・將軍の源実
 朝には、長文の敬慕の作品もあり思いはひと
 しお、鎌倉に建立した句碑には、毎年の命日
 の集いも盛況。

相撲界からみれば、菅は、古くからの「身
 内の親分」であり、昭和三十一年禪もともに
 した親友双葉山が斯界改革を願って作った運
 営審議会の初代会長になるなど、一貫して土
 俵や作法の数々の改革の実現を手がけた。こ
 れらの長い関わりは、日本相撲協会の年報な
 どにある。

また同氏を偲んで立てられた二つの記念館
 (山梨県河口湖畔の菅記念研修館、並びに秋
 田県湯沢市(旧雄勝町)上院内銀山異人館)
 に、遺品・蔵書が所蔵・展示されている。

(森 一久)

津野田知重(つのだ・ともしげ)

大正六—平成元年(一九七一—一九六〇) 大本營

參謀・電源開發(株)秘書役・日本科学技術振興財団・東京十二チャンネル専務

(いづれも初代)

日露戦争時に乃木將軍の參謀だった是重の三男で名付け親も同將軍。陸士・陸大とも首席の俊英、支那派遣總軍參謀を務めていたのを、父の陸大の教え子東条英機が參謀總長の時、才を見込み一存て東京の本部に呼び戻した、など両者の縁は浅からぬものがあった。父と同様、軍人の政治関与を強く戒め、東条が航空總監のとき直接諫言したこともあった。その彼がついに、戦争末期、牛島辰熊らと入念に練った「東条英機暗殺計画」が実行寸前で発覚。と同じ時に、東条内閣が退陣し、未遂に終わる。軍事裁判にかけられるも極刑は免れた。

この経緯は同名の書、森川哲郎著・鶴見俊輔解説(現代史出版会、昭和五十七年)に、また知重の出自と経緯を詳述した書(津野田忠重『わが英機暗殺計画』徳間書店、昭和六十年)がある。後者は兄忠重が、頑固に口を閉じ続けた本人から、戦後初めて直接聴取して出版したものである。

もともと、戦争に突入し国民も緒戦の勝利に酔う最中、政治家・技術者・官僚・軍部の

一部には、無謀な戦いを少しでも有利な形に収拾しようとする努力があり、津野田と同様官家を巻き込んだのもあったが、東条首相と憲兵隊の手で次々と弾圧・逮捕の憂き目に遭った。その中で海軍での暗殺謀議と、技術官僚の国力の客観評価に基づく東条退陣工作は、史料の価値を持つ(文献は前記二書の引用書)。例えば松前重義『二等兵記』(日本出版協同、昭和二十五年)―などにある。

さて津野田は戦後、伯父小坂順造(電源開発初代総裁)や橋本清之助らとともに、原子力平和利用の着手に尽力するが、ついで、戦中の行動への強烈な自省から、日本人の科学教育への献身を思い立つ。北の丸公園の科学技術館の創設は、陸士・「事件」以来親交の仲の三笠宮の尽力で、皇居を見下ろすあの高層建築が可能になったもの。日本最初の科学教育専門のテレビ「東京十二チャンネル(現テレビ東京)」は、彼が「日本人の科学教育こそ平和国家の基盤」と、単身ワシントンの米軍総本部に、戦中体験を基に直訴、テレビ波の返還が実現して創業し得た。科学技術学園と合わせ三つの組織の経営責任者として数年間活動するも、テレビ・科学館の経営破綻の責任を取って辞任した(三十年のあゆみ編集委員会編『三十年のあゆみ』日本科学技術振興財団出版、平成元年)。

その後テレビ局は日経新聞が引き取り、

「普通局」に、北の丸の科学技術館は、政府・財界の強力な支援で、年間一〇〇万人近い青少年の研鑽の場となっている。(森 一久)

坪井正五郎(つばい・しょうごろう)

文久三—大正二年(一八三九—一九一三) 東京帝

国大学教授・人類学者・考古学者

旧蔵の資料は、祖父信道(蘭方医)、父信良(同)、長男誠太郎(地質学者)のものとともに、東京都北区の誠太郎旧邸に保管されていたが、平成十六年(二〇〇四)同邸の解体に際して寄託を受けた東京大学大学院情報学環が「坪井家資料」として保管・整理に当たっている。このうち「坪井正五郎資料」約七〇〇〇点は原秩序順に排列した仮目録の作成が終了し、将来の公開を目指してデジタル・アーカイブの実証実験が進行中である。

「坪井正五郎資料」の内容は、直子夫人や家族共用のものを含む数系統の日記、講義録・ノート、学生時代に作成したものを中心とする私家雑誌、論文・エッセイ等の草稿、各種のメモやスケッチ、雑誌掲載論文の切抜き、履歴書や辞令、写真など多岐にわたり、デスマスクや自ら考案した玩具等の立体物も含まれている。これらの資料のうち数点は平成十八年に足利市の草雲美術館で催された特別展に出品され、図録『発掘一二〇年 足利公園古墳と坪井正五郎』にも掲載された。来信は

橋本清之助（はしもと・せいのみすけ）

明治二十七年（昭和十一年）（六四一六）
政治家・日本原子力産業会議代表常任理事

孫の久道氏によると、ほとんど関係史料は残されていないが、なお探してみるとのことであった。奥健太郎氏が橋本久道氏から提供された「遺稿」三点（ただし、久道氏の父がワープロに入力して印字し、冊子として十三回忌に近親者に配られたものを底本にして。明治二十七年（一才）より昭和二十六年（五十才）まで）、「二・二六事件」「翼賛政治の顛末」を紹介している（慶應義塾大学法学研究会『法学研究』七十八―十、平成十七年）。これ以前に筆者は、昭和三十九年（二十九）にインタビューを行い、そのテープおよび書き起こしを、その後憲政資料室に寄贈した。また同年に筆者は同氏から「翼賛政治体制協議会の使命」「翼賛政治会の成立まで」「マッカーサー宛・追放条項中の『翼賛政治体制協議会構成員並に推薦議員』の項を削除するの請願」「翼賛政治体制協議会記録」および「新日本同盟パンフレット」他のパンフレットを拝借してマイクロフィルム化して紙焼きを行った（これも憲政資料室に寄贈した）。なお伊沢多喜男文書研究会『伊沢多喜男関係文書』（芙蓉書房出版、平成十二年）に昭和十一年の伊沢

宛書簡一通が収録されている。

伝記はない。奥氏によれば自叙伝に準ずるものとして『電気新聞』（昭和五十一年六月二十一日―七月三十日）に連載された「雑草の生きた道」二十二回があり、これは後に一冊の本としてまとめられた（『雑草の生きた道』青水会、昭和五十六年）。また内政史研究会が行ったインタビュー記録『橋本清之助氏談話速記録』（昭和三十九年六月）および大霞会『内務省史』編纂に当たって行なった「橋本清之助氏座談会（翼賛選挙）速記録」（昭和四十三年四月。現在憲政資料室の「大霞会所蔵内政関係者談話録音速記録」の一冊として閲覧できる）が自らを語った数少ないものである。著書に『最近欧米都市の発達』（新政社、大正十四年、彩雲堂、昭和二年）、『原子力開発についての橋本提言・現代文明と新しいエネルギー観』（日本原子力産業会議、昭和四十九年）、そして死去の翌昭和五十七年、橋本がその代表常任理事をつとめた日本原子力産業会議から遺著として『現代文明縁起・二十一世紀への提言』が刊行された。この中には、多少の回顧も含まれている。また巻末に詳しい年譜が付されている。日本原子力産業会議については、森一久編著『原産 半世紀のカルンダー』（日本原子力産業会議、平成十四年）がある。

また妻が難病で亡くなるまでのことを記し

近親者に配布した小冊子『断絃の記』（昭和三十三年）もある。その他に「対支貿易と横浜」（支那貿易視察団編『支那貿易事情視察報告書』横浜輸出協会、大正九年）、「非生活化政治の生活運動」（『新政』大正十三年一月号）などがある。

橋本に触れたものとしては、有竹修二『唐沢俊樹』（唐沢俊樹伝記刊行会、昭和五十年）がある。（伊藤 隆）

八田謹二郎（はった・きんじろう）

嘉永六一―昭和三年（一七五二―一九一六） 衆議院議員

議員

八田徳三郎（はった・とくさぶろう）

明治四一―昭和十年（一八七二―一九四五） 貴族院

多額納税者議員

謹二郎・徳三郎の旧蔵史料を含む「八田家文書」は、広島県立文書館に寄託されている。同文書は、江戸期から昭和戦前期にかけての約一万三〇〇〇点に及ぶ史料群である。近世の地主・酒造業等の経営に関する史料、近代の地方行政・国政に関する史料など多彩な歴史史料が含まれる。八田家は、広大な山林を有する地主であり、近代には、醸造業、金融業、洋雑貨店の経営等を行い、鉾山開発にも進出した。

謹二郎は、第一回衆議院議員総選挙に広島二区から選出され、当初、無所属であったが、

編者略歴

伊藤 隆

一九三二年 東京都に生まれる

一九六一年 東京大学大学院修士課程修了

現在、政策研究大学院大学リサーチフェロー、
東京大学名誉教授

〔主要著書〕

昭和初期政治史研究 大正期「革新」派の成立
昭和期の政治（正・続）

季武嘉也

一九五四年 東京都に生まれる

一九八五年 東京大学大学院博士課程単位
取得

現在、創価大学文学部教授

〔主要著書〕

大正期の政治構造 選挙違反の歴史 大正社
会と改造の潮流（日本の時代史）（編）

近現代日本人物史料情報辞典 3

二〇〇七年（平成十九）十二月十日 第一刷発行

編者 伊藤 隆
季武嘉也

発行者 前田 求 恭

発行所 株式会社 吉川弘文館

郵便番号 一三三〇〇三三

東京都文京区本郷七丁目二番八号

電話 〇三三三八三九一五（代）

振替口座 〇〇一〇〇一五二四四番

http://www.yoshikawa-k.co.jp/

印刷 株式会社東京印書館

製本 誠製本株式会社
装幀 山崎 登

© Takashi Itō, Yoshiya Suetake 2007. Printed in Japan
ISBN978-4-642-01447-2

〔日本複写権センター委託出版物〕

本書の無断複写（コピー）は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡下さい。